

新しいマーケットリスク規制資本の モデリング

2016年3月10日（木）開講、全3回

OTC クオンツスクール

キーワード：Fundamental Review of the Trading Book, ES (Expected Shortfall), Stressed Calibration, Internal Models Approach (IMA), Standardized Approach (SA), Sensitivity-based Method, Default Risk Charge (DRC), Market Liquidity, Risk Factors

今年の1月にバーゼル銀行監督委員会により、トレーディングブックに係るマーケットリスク最低必要資本の計算方法が公表された。現在適用されているマーケットリスク資本計算と大きく異なるところは、1) 内部モデルの自由度がある程度制限され、トレーディングデスク単位でのモデル承認となること、2) 資本計算のリスク尺度が VaR から ES(Expected shortfall)に変更されたこと、3) 標準的アプローチが、分散とヘッジ効果を考慮してリスク感応的となる一方、内部モデルを使う場合でも標準的アプローチで計算した数字を公開しなくてはならないこと、4) 信用リスクを倒産リスクと信用スプレッドが変動するリスクに分け、前者を ES で計算されるマーケットリスクから切り離して別途チャージする Default Risk Charge (DRC)を導入したこと等である。

LCH や JSCC といった CCP が当初証拠金計算ですでに ES をつかっているように、金融機関内部のリスク管理でも、VaR から ES への移行（または併用）は避けることはできない。新しいマーケットリスク資本規制の枠組みは、内部リスク管理でも参考になるところが多い。

今回のセミナーでは、新しいマーケットリスク規制についての標準的アプローチと内部モデルアプローチをモデル面から定量的に考察していく。

概要

- リスク尺度が従来の VaR から ES に変更されたことをうけ、VaR と ES の理論的性質を考察する。また、VaR や ES の様々な推定方法をしめし、資本計算モデルのバックテストについて整理する。
- 標準的アプローチ(SA)の感応度ベース方式(Delta, Vega 及び Curvature)や倒産リスク・チャージの計算公式の背後にある理論を説明する。必ずしも明らかでないマルチカーブやクロスカレンシー・ベースのチャージ方法についても詳しくみていく。
- 内部モデル・アプローチ(IMA)の要件を整理して、流動期間の取り込み、ストレス期データへのカリブ

レーション等を説明して、具合的な計算式の理論的意味を分かりやすく解説する。倒産リスクモデルの倒産シミュレーション方法を具体的に考える。また、損益説明分析などのモデル承認の要件についても考察する。

セミナー対象者

- ・ 金融機関でマーケット部署やリスク管理部署の方
- ・ 金融機関のデリバティブ、ALM、リスク管理等の関係部署の方
- ・ 監査法人でデリバティブ業務等の監査に携わる方、リスク管理に携わる方
- ・ 金融リスク関係のシステム構築に携わる方
- ・ レギュレーター

講義日程

第1回	第2回	第3回
3/10 (木)	3/17 (木)	3/24 (木)

時間： 18:00 – 21:00

会場： JAビル カンファレンス 401B

定員： 25名（申し込み人数が定員になった時点で締め切らせていただきます）

担当講師

高田勝己（株式会社 Diva Analytics 代表取締役）

平成元年、一橋大学経済学部卒業。日本債券信用銀行 資金証券部 調査役、さくら銀行 商品開発部 上席調査役、コムルツ証券会社 債券部トレーディングデスク ディレクター、ベアースターンズ・ジャパン 債券部 マネジングディレクター、RBC(Royal Bank of Canada)キャピタルマーケット・ジャパン ディレクターを経て、現在、株式会社 Diva Analytics にて金融デリバティブモデルにかかるコンサルティングやシステム開発に従事するかたわら東京大学大学院経済学研究科で非常勤講師を勤める。

シカゴ大学 MBA Analytic Finance 専攻。東京大学大学院 数理科学 後期博士課程修了。

受講料

150,000円（消費税別）

学生割引：フルタイムの学生は50%の受講料で受講できます。

お申込み

OTC クオオンツスクールのホームページ <http://www.divainvest.jp> から申し込んでください。

講義内容

第1回 VaR と ES (期待ショートフォール)

- ・ VaR と ES の比較
- ・ Coherent と Elicitability
- ・ VaR と ES の性質
- ・ VaR と ES の推定方法
- ・ バックテスト

第2回 標準的アプローチ (SA)

- ・ 感応度方式の数学
- ・ リスクファクターと感応度
- ・ 感応度方式 (Delta と Vega)
- ・ 感応度方式 (Curvature)
- ・ マルチカーブの取り扱い
- ・ クロスカレンシー・ベース・リスク
- ・ 倒産リスク・チャージ
- ・ 残余リスク・アドオン
- ・ SIMM (当初証拠金計算の標準モデル) との比較

第3回 内部モデルアプローチ (IMA)

- ・ リスク・ファクターの特定化
- ・ リスクファクターごとの流動期間の取り込み
- ・ ストレス期データへのカリブレーション
- ・ 倒産リスク・チャージ
- ・ バックテストによる掛目
- ・ 固有信用スプレッドリスクとモデル化できないリスクファクター
- ・ P&L 説明力のテスト

(注) 講義内容は見直し等により変更になる場合があります。